

『黒部の太陽』伝道師 編

[登壇者] 大田 弘
(株)熊谷組 社長

本企画「スゴ腕技術者に学ぶ」も今回で折り返しの第7回目。後半のスタートを飾るのは(株)熊谷組社長の大田弘さん。『黒部の太陽』に憧れ、自らも同じ世界に飛び込んだ大田さんに、土木の魅力と技術者としての生きざまを聞いた。

生まれながらの土木技術者

大田さんは黒部ダムのおもむきにある宇奈月村(現黒部市宇奈月町)で生まれ育った。小学生の頃はダム工事の真っ最中ということで、多くの作業員が工事に悪戦苦闘しながら苦楽をともにする生活を日々目の当たりにしていたとのこと。また、父親が黒部ダムで作業をしている同級生も多かったようだ。

難工事の末、大田さんが小学5年生の時に黒部ダムが完成した。村にただ一つある学校のテレビでダム完成のニュースを見て、村を挙げて祝ったという。しかし、黒部ダムは断崖絶壁の危険な作業場であり、工事用トンネルである大町トンネルは「破碎帯」を突破するという屈指の難工事だった。そのため、同級生の中には父親を事故で亡くした人も多かったそうだ。そんな話を聞いていたためか、大田さんは黒部ダム完成のニュースを見た感想文に「ダムを安全につくれる土木技術者になりたい」と書き、その頃から土木技術者になることを目指していたのだ。

男とは一度決めたら突き進むもの!

高校では普通科へ進学。当時の村では、7割の人が専門学校へ行き、早く技術を習得して村のために仕事をするのが常識で、大学へ進学するのは10年に1人くらいだったそうだ。土木技術者になる夢を抱く大田さんは、村へ帰らないのではと心配する親を説得し、布団一組と片道切符だけを手に持ち、仕送りは一切いらぬという条件で北海道大学へと進学した。「私は祖父から『男は、一度決めたことは最後まで曲げちゃいかん!』と教えられてましたからね。今思えば、他の学問には目もくれず土木一直線だった」と当時を思い出しながら語った。

学生時代は、多くの時間を学費や生活費のためにアルバイトに費やす一方で、趣味の山歩きも楽しんだ。大学卒業後は晴れて念願の熊谷組へ入社。入社後初めての大きな仕事は、香港での地下鉄建設のプロジェクトだった。入札の

孫にも語る土木の魅力

設計仕様書は英国基準に則っており、英語に悪戦苦闘しながらも提案書の作成に奔走し、見事落札。「負けてたまるか! という気持ちで挑みましたね。諦めなければ夢は必ず叶うものと気づきました」と語った。

現在は社長として各地の現場を飛び回る大田さんだが、休日によくお孫さんと遊んだりしてリフレッシュをする



写真1 取材の風景



写真2 本社入口横にある銅像の前にて

おおた・ひろしさん

1952年富山県生まれ。北海道大学工学部土木工学科を卒業後、(株)熊谷組に入社。土木設計部と技術研究所を経て、1993年に経営企画部へ異動。経営企画本部長や常務取締役を経て、2005年より熊谷組の代表取締役社長。

腕 黒部の地獄に学べ！

そうだ。お孫さんとはどんな話をされるのですか？ と聞くと、「やっぱり土木に関する話をしてみようかな。どうして蛇口をひねると水が出るのかわかる？ とか、土木は人の生活にとっても身近な仕事なんだよと、さりげなく教えたりしてますね」と、休日に戻ったような笑顔で語った。

ときには黒部の伝道師として、大学の講演会で、破砕帯突破の苦闘を語り継いでいる大田さん。大田さんが語られた『黒部の太陽』を勝ち取るまでの『黒部の地獄』にこそ学ぶべきものがある」という言葉には、諦めずに困難と闘い続けた黒部の技術者たちのようになってほしい、という熱い思いを感じることもできた。

また、聖徳太子の十七条の憲法の第一条にある「一曰、以和為貴（一に曰く、和を以て貴しと為す）」という名文も引用された。「人と人が真剣に意見をぶつけ合い、体当たりして壁を乗り越えた先に生まれた境地が和であり、既存の和を保つために何も言わないのとは違う。覚悟をもって真剣に現場へ挑め」という意味の力強いメッセージだ。前代未聞の破砕帯突破に向けて、命と技術者の誇りを掛けて取り組んだ

腕 常識を変えるのは大変

「人間力の結集」にこそ、学ぶべきところがたくさんあると実感した。

しかし、伝道師である大田さん自身も『黒部の地獄』を経験したことがあった。それは、日本初のNATMでトンネルを掘削するプロジェクトでのことだ。従来とは異なり、支保工の代わりにロックボルトを使うという工法であったため、いざトンネルを掘ろうとしても作業員の方々がトンネルに入ってくれないという問題が発生したのだ。「計算・理論上は安全だと説明しても、当時の常識からするとありえない工法でしたからね」と語る大田さん。

状況打開のために、「口だけでなく一緒に命を懸けてトンネルに入る」と訴え続け、ようやく着工に至った。自分の計算に絶対の自信がなければとうていできない行動に作業員の方たちも納得し、トンネルに入ってくれるようになっていった。

最後に、大田さんは「学生さんへ次のことを伝えたい。技術に限らず、これまでの『常識』を変えるときには大きな抵抗を受けるものです。ましてや、絶対に失敗が許されないプロジェクトであれば保守的になるのは当然。しかし、逆境を乗り越えるための知識や技術力に加

腕 取材を終えて

え、挑戦心や執念を持って臨めば、必ず成功することができます」と、メッセージを送ってくれた。

土木はダムや橋などの巨大構造物だけではなく、土木の多くは見えない・意識されない私たちの『当たり前前生活』を支える重要な技術なのだ。その『当たり前前生活』を陰ながら支えることができる土木は、筆者の想像以上にとてもない仕事なのではないかと感じる事ができた。自らの身を律し、逆境に怯むことなく努力し続けていきたい。

学生編集委員 相沢 圭俊、三室 碧人

今月のスゴ腕 技術者からの一言

土木というのは評価がすぐには返ってこないし、直接に感謝されることも少ない仕事です。ですが、100年以上もの長いスケールを見つめる仕事は他にないと思います。学生の皆さんが感じるのとは難しいと思いますが、時代をつくる「土木のすごみ」というものを感じてほしいですね。